

熊野川(天ノ川)を語る会 議事骨子

開催日時 平成17年12月11日(日)13:30~16:00

開催場所 五條市大塔町ふれあい交流館 大ホール

出席者 担当委員 井伊委員(進行役) 木本委員、津田委員

同席委員 江頭委員、清岡委員、瀧野委員、中島委員

意見発表者 泉井弘一氏(五條市)、北村勇氏(五條市)、家田公雄氏(野迫川村)、小倉徳太郎(野迫川村)、中上栄一氏(野迫川村)、青木健一氏(天川村)、久保彰守氏(天川村)

「熊野川を語る会」を開催し、五條市大塔町、野迫川村、天川村を代表する方々による熊野川(天ノ川)との係りや地域の自然、歴史・文化、産業、地域振興策等についての意見発表、代表者および傍聴者との意見交換を行った。議事骨子は以下のようである。

1. 熊野川懇談会について

- ・ これまでの河川法の改正の流れ、熊野川懇談会の設立の主旨について説明が行われた。

2. 熊野川を語る会の主旨について

- ・ 熊野川流域で「語る会」が開催されるに至った経緯、懇談会の考え方について説明が行われた。

3. 自己紹介・意見交換

<主な意見>

(1) 地元代表者による意見発表

- ・ 猿谷ダムのヘド口の堆積の原因として取水口横を流れる谷筋への土砂投棄が上げられる。このことについて何度も管理者へ訴えているのだが、管理境界を理由に対応していただけない状況である。この結果、土砂はダム湖に流入し、取水口を塞ぐようになっている。ヘド口の発生を未然に塞がずヘド口を作っているような状況なので、上級官庁である管理者は、県、市町村等への働きかけを行いダム湖への土砂の流入を防いでほしい。また、ダム湖付近の廃道とダムの間の法面が土砂の捨て場になっている。これをほっておくとヘド口の原因となるので、管理者として対応してほしい。また、漁協が知らないうちに釣り場が出来てしまっているのも問題である。【泉井氏】
- ・ 上流の住民は、不法投棄をさせないように対策を講じる必要がある。スカイラインから谷を覗くと、テレビや自転車が捨てられている状況である。これらのごみは谷を流れ、いずれ下流まで汚染されることになる。上流の谷でもビニールなどが引っかかっていることがあり、不法投棄には十分注意を払う必要がある。山は林業不況により荒廃してきている。川を守るために森林の間伐や整備の費用を負担してほしい。キャンプの客は多くなってきているが、村への恩恵は少なく、ただ、ごみが増えるばかりである。【家田氏】
- ・ 野迫川村の森林は、人工林が70%を占めている。以前は、1haあたり300~400万円の収益を期待し整備を行ってきたが、現在では1/10に価値が減り、生活意欲、森林整備への意欲、川をきれいにしようという意欲がなくなってきている。上流の住民として、下流への義務として山を作ってきた。これからは、河川自体の整備だけではなく、治山等の流域整備を行うことが重要である。昔の野迫川の谷には、ホタルやキリクチ(イワナ)がいっぱいいたが、高野龍神スカイラインができてほとんどいなくなった。スカイラインの道路排水が谷を伝い水質が汚染されている。夕立等が降ると、車道のゴミ(タイヤ粉塵等)により初めは黒い水が流れることがある。最上流においても川が汚れ生態系が崩れてきた。明治22年の水害、昭和28年の水害、伊勢湾台風、ダムの建設等により、川の状態が変貌し、その都度、村の暮らしが変化している。【中上氏】
- ・ 大塔村は、星と空気と水がきれいであるとしてPRし、観光資源にしてきた。しかし、実際は、ダム湖の水は濁っておりダムの流木も問題である。ここ、1年間の流木が放置されているものもあるので、早急に回収して欲しい。一度ダムに溜まった水は、水温も低く、腐っているのか、鮎は育たない。維持用水としてダムの水は(ダムから直接)流して欲しくない。アユの成育に適した川原樋川の水を直接(ダムに一旦入れないで)下流に流して欲しい。地域振興策として猿谷ダムでバス釣りの営業も考えたが、猿谷ダムは、水位の上下変動が大きく、ボートの上げ下ろしが困難で貸し船の営業が難しい。コイ、フナなどを放流していたが、満水時に卵を産み、水位がすぐに下がるので、卵が死んでしまう。【北村氏】

- ・ 間伐材を谷に捨てると、降雨時にこの間伐材が谷を堰止め、谷を洗掘する。このような間伐材の処理についても注意すべきである。また、林道も、災害で損傷してもそのまま放置している箇所が多い。何とかしてほしい。【小倉氏】
- ・ 天川村は、昔から水に接し、独自の文化を形成してきた。環境庁から名水百選に選ばれる等、水文化のある村である。一時、川が汚れたが、近年、各戸負担して下水道を完備したため川がきれいになった。世界遺産に指定され、年間70~80万人の人が天川村を訪れている。洞川地区までは観光客は増えたが、山への観光客は増えていない。【青木氏】
- ・ 洞川には大正時代にアユ、アマゴ、ニジマス、カワマスを放流したが、戦時中のタンパク源として全ていなくなった。昭和35年から再度放流している。昭和40年頃からの塩ビパイプの普及により、家庭排水が(土に浸透することなく)直接川に排水され、川が汚れ、子供たちが川で泳げなくなった。水生昆虫も全滅状態であった。その後、ボランティアで蜉の繁殖に努め、現在では、ホタルを通して地域づくりを行っている。今年、河川工事が行われ、一週間くらい濁水が流れたため、ホタルの幼虫が死んで、近年増えてきていたホタルが激減した。川上村などの吉野川では、河川工事において濁水対策をしているが、天ノ川では無対策なのがおかしい。【久保氏】

(2) 一般傍聴者も含む全体での意見交換

- ・ 今回の語る会開催が本当に住民に知られていたのか、管理者側のアライバづくりの会になっていないか。熊野川は自然がうまく残っていない。熊野川にしかない整備があるはず。治水、利水、景観のマスタープランを策定すべき。(本田氏)
- ・ 懇談会は、河川管理者と地域住民の話し合いにより河川整備を行うこと重要である。(江頭委員)
- ・ 上流の方々が、熊野川に対し非常に気を使っていることがわかった。(瀧野委員)

以上